



2019年1月15日

高野 文夫 NPO日本プレゼンテーション協会理事長

人の器やそのパワーは電池で説明できます。

1、誰でもある程度出世できる時代は終わった

1960年代の所得倍増計画の波に乗っていた時代から、プラザ合意がなされる1986年位までは経済が右上がりで、サラリーマンは3つの保護政策で安心できました。

3つの保護政策とは以下の通りです。

- ① 年功序列だった・・・実力が無くても年功で出世できた。
- ② 定年性だった・・・仕事が出来ない人でも60歳まで雇ってくれた。
- ③ 労働組合が強かった・・・犯罪でも冒さない限り、不当に解雇される心配が無かった。

そうなんです！ 日本はサラリーマン社会という、いわば社会主義国家だったのです。余裕のある会社はしっかりと弱者を守ってくれたのです。

しかし今や、アメリカと同じく実力社会になったと言えます。しかも実力があるだけでは生き残れなくなっています。それはどう言う事かということ、与えられた仕事をこなす能力に加えて、人間関係をスムーズにこなすコミュニケーションスキルが必須の時代になったという事です。

コミュニケーションスキルと言えば、ゴマすりやおべっかのスキルかと思われるかも知れませんが、極論すれば必ずしも間違っていないと思います。サラリーマン社会のみならず、人間社会あるいは国同士の付き合い（外交）でもゴマすりやおべっかほど、避けて通れない重要なスキルはありません。

また今私は、自分でも会社を持っていますし、NPO 団体のトップの理事長職にも就いています。私自身の経歴は確かに完璧ではありませんが、係長から課長・部長・事業部長と昇進して行く中でサラリーマン社会の力学をそれなりに見つめてきました。

そして今は、小型のダイナモ人生（自力で頑張れば壊れるまで働ける永久機関）を送っていると言えるかもしれない。



特に50歳代から経営コンサルタント会社の役員として、また現場の営業本部長としての職務の中で100社以上の企業の内実をみつめられたのは幸運でした。サラリーマン社会での出世の力学を研究する上で大変為になったのです。

2、人間の器やパワーの乾電池理論

最初にお断りしておきますが、これはあくまでも私が勝手に創造した理論です。30年に近いサラリーマン生活を経て、会社を早期退職して自営業に入った私は、サラリーマン社会の厳しさと悲哀、そして楽しさ面白さも経験しました。そして、以下のような考えに至りました。

会社の仕事の守備範囲の大きさは、アルカリ乾電池に例える事が出来るのです。電池は次の写真の如く4種類ありますね。容量の大きい物から小さい順に、単一、単二、単三、単四と呼ばれています。

サラリーマン社会の肩書に照らし合わせてみますと、その仕事量や瞬発力やパワーの大きさから、単四が係長や主任クラス、単三が課長、単二が部長、単一が役員や社長・・・となぞらせる事ができます。

これらの乾電池は、確かに充電して使い直す事ができますが、ほとんどの場合は一回きりの使い捨てです。サラリーマンも今では使い捨て社会です。定年になったら、会社を訪ねても誰も相手にしてくれませんが、出来るだけ来ないでくれというのが本音です。



そして、サラリーマンとして65歳の定年を迎えるまでに、会社や世の中に



貢献する仕事量は乾電池の容量に例えられるのです。
定年時の肩書が、係長や主任だったとしたらサラリーマンとしての貢献度は、
すなわち単四の仕事量を終えておわりになるという事です。

電池の種類	大きさ	耐用時間	定年時の肩書
単四電池	最小	0.35-58時間	主任・係長
単三	中型汎用品	0.9-140時間	課長
単二	まあまあ大きい	2.2-380時間	部長
単一	最大	5.5-800時間	役員・社長
ダイナモ (自家発電)	いくらでも使える (青天井)	機械が壊れるまで 無限大	企業家・経営者

私は30代から40代前半まで、{プレジデント} という雑誌を定期購読していました。明治維新前後に大活躍した西郷隆盛や、江戸時代にこの国に大変貢献した二宮金次郎や日露戦争でロシアのバルチック艦隊を殲滅させ、日本国が植民地になるのを救った東郷平八郎元帥などの生き様を特集しているものが多かったのです。

正に {坂の上の雲} を追い求めて活躍した英傑たちの物語を、世のリーダーたちに語りつづけ、世の現役の社長や、社長を目指して頑張っている人達への応援歌のような雑誌でした。胸躍らせて読んだものです。

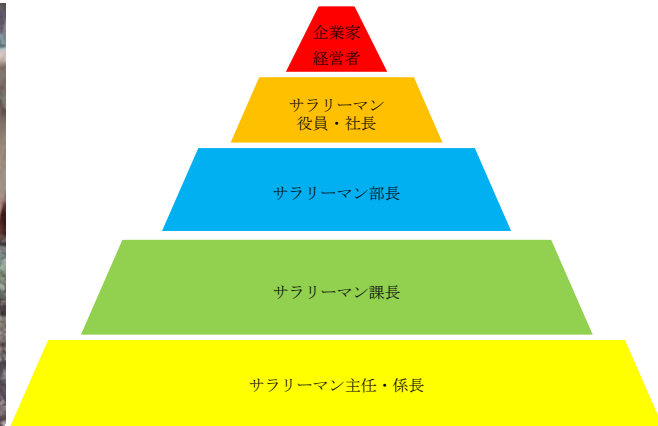
ところがある時期から、その内容たるや中堅マネージャーに役立つであろう実用書に代わってしまったのです。正に単二や単三レベルのサラリーマン対象の雑誌です。
私はうんざりして購読を止めました。今でもプレジデントという名前を掲げていますが、{主任} とか {マネージャー} に、本の名前を変えたらいいのにと思っています。

なんで雑誌 {プレジデント} が単なる {マネージャー} に代わってしまったのでしょうか？ そこが正に重要なポイントなのです。世の趨勢をしっかりと反映していると私はみます。日本のサラリーマン社会に器の大きい大物が求められなくなったと言うか、大物が不在になったのです。

私は日本の将来を考えた時、それは大変な事だと思っています。世の中が小者だらけになってしまったなら、この国から世界を動かすような真のリーダーが出なくなり、益々ダメな国になると思われるからです。日本沈没になり兼ねません。



《理事長のコーナー&プレゼン最前線 2019 年 1 月号》



嘗ての会社社会のヒエラルキー
(可愛らしさと、風見鶏でそこそこ出世できる世界)

さて、話を戻しましょう！
確かに NEC のような大企業とベンチャーや町工場のような中小企業とは同じ肩書でも仕事には大きな差があることは確かです。もちろん、同じ係長でも大きな差があることは確かです。しかしここでは概論を述べていますのであしからず。

ここで、私が特に強調したい事は以下の事です。

3、パレートの法則

何時の時代もやる人はほっといてもやり、やらない人はやらない、それが自然法則なのです。

そして、何時の時代もどのような組織にもパレートの法則が生きています。(パレート則；20対60対20で層をなすという法則)
上級の20%は要領よく頑張っているから、もうけて裕福な生活をしています。



《理事長のコーナー&プレゼン最前線 2019 年 1 月号》

中級の60%は・・・、頑張るのだがなかなかうまくゆかない、いわば苦しい人生を生きる人達である。要領が悪いか諦めて、そこそこでいいやと風見鶏のように世の趨勢に流されているのです。

最下層の20%は欧米では“マーブリック；離れ牛”と呼ばれています。パラサイト群ともいいます。この最下層の人達は幾ら尻を叩いてもダメな群像です。

そして不思議な事に・・・、上層に分類される優秀な20%人達を集めてグループを作ると・・・、時間が経つにつれて、その優秀な人達が、20対60対20に層を作ると言うのです。このことに私は注目するのです！



優秀群に分類される人達でも、いずれ優秀、普通、劣等・・・このどれかに分類されてゆくと言うのです。組織社会に新鮮で活発な場や空気を作って、効率を上げようと思った時、一体どの層にフォーカスすべきなのだろうか？

上層の20%には最大効果を期待し、中層の60%には、全体の効率を5%でもいいから引き上げるのです。数の効果もあるから全体的には大きな結果をもたらすだろう。

最下層の離れ牛群の20%は、企業では入社時に選抜して入れないようにしているが、社会ではそうはいかない。出来る人達や上層の中に生きる人達が惻隠の情を持って喰わせるしかないのです。

それらの行為は、自分の心や肚を作る、そう！ご自身の人間力陶冶の手段でもあるのだから・・・、それなりに有難い人達だと思っても良いのです。



《理事長のコーナー&プレゼン最前線 2019 年 1 月号》

マザーテレサも、ガンジーもその様な層に自ら飛び込んで行って、苦勞しながら、御自身が神に近づいたのだと思うのですよ。

次は2019年2月15日号に続きます。